

人間巨大化の150年史

~Attack of the Alice not a mile high~

佐藤正明

(一) アタック・オブ・アリス

『不思議の国のアリス』の中でアリスは何度も体が大きくなったり小さくなったりする。大きくなったときは、周囲にさまざまな脅威を与えることになる。順を追って見てゆく。

〔第二章〕突然目の前に現れた *Eat Me* ケーキを食べて、背丈が九フィート以上になる。そのときに泣いて流した数ガロンの涙でできた池で鳥や獣はずぶぬれになる。

〔第四章〕白ウサギの家の中でみつけた水菓を飲むと、体が部屋いっぱいまで拡大する。窓のところろにきた白ウサギやバットに手をのばして驚かせ、温室の上に落とす。また煙突から下りてきたトカゲのビルを、暖炉まで下りてきたときに蹴り飛ばす。

〔第五章〕青虫に教わったとおり、キノコのへりを両手でもぎとり、左手に持った切れ端をかじると、首が伸びて、木々の梢のはるか上まで達する。木立の中に頭をつっこむと、ハトの巣に出会う。そこで、卵を守ろうとするハトと言ひ合いになる。

このあと。キノコの右端と左端を使って身長を調整をする。

〔第六章〕第七章〕お茶会に加わるために左手のキノコで二フィートまで大きくなり、お

茶会で帽子屋たちとやりあう。その後、庭に続くドアを通るため、背丈を一フィートに縮める。このあと法廷にいくまで身長を調整はない。

〔第十一章〕第十二章〕法廷に入る。傍聴席にいと(キノコの効果が切れたのか)だんだん大きくなり、となりのヤマネが窮屈だと抗議する。「アリス！」と証言に呼ばれたとき、スカートですそで陪審員席をひっくりかえしてしまふ。王様に「第四十二条、一マイルの身長の方は法廷を去るべし」と宣告される。「わたしは一マイルもないわ *I'm not a mile high*」と憤慨する。理不尽な裁判が展開するが、すっかりもとの大きさにもどって自信をとり



もどしたアリスは「だれがあなたのこと気にするっていうの？ あなたたちただのトランプじゃない！」と叫ぶ。

以上が『不思議の国のアリス』におけるアリスの身体巨大化の履歴と住人に対するアタックの結果である。巨大化のツールは場面ごとに異なっている。多くの場合、不注意に飲み食いした結果で、巨大化で住人に与えた影響は意図したものではなかった。

巨人は神話伝説・昔話などに数多く登場するが、登場人物を巨大化するという発想は、おそらくこの作品が最初であろう。

(二) 危ない巨人たち

体が巨大化することで、多くの場合、町に破壊をもたらすことになる。

映画『戦慄！プルトニウム人間』The Amazing Colossal Man (1957) では、ネバダ砂漠のプルトニウム爆弾実験場で事故により被曝したマニング中佐は、軍の治療施設に収容されたが、日々体が巨大化してゆく。その状況から精神が混乱して施設を逃げ出し、ラスベガスに現れて、町を破壊する。

映画『ジャイアント・ベビー／マイクロキッ

ズ2』Honey, I Blew Up the Kid (1992) では、発明家サリンスキーが開発中の物質拡大装置のビームをうっかり自分の二歳半の息子に浴びせてしまう。赤ちゃんは電子レンジやテレビの電磁波を浴びることで巨大化が進む。やがてベビーシッターの目を盗んで家を抜け出し、ラスベガスに現れ、町をパニックにおとしいれる。

映画『妖怪巨大女』Attack of the 50 Foot Woman (1958) は『戦慄！プルトニウム人



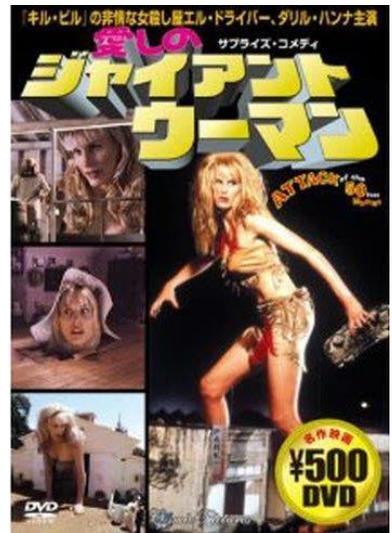
間』のヒットに影響されて製作された。カリフォルニアの小さな町に住む裕福な女性ナンシーは郊外を車で運転中に、球形のUFOに遭遇し、背丈三十フィートの宇宙人にさらわれそうになる。だれも信じないが、夫を説得してふたりで砂漠に行く。そこでUFOが現れてナンシーを連れ去る。夫は浮気相手とい



つしよになるいい機会だと思ひ、ひとり車で逃げる。翌朝、ナンシーは町のビルの屋上で発見され、医者に見立てでは何らかの放射線を浴びたようだという。やがて彼女の体は巨大化し、屋敷内で拘束されるが、夫の行方をさがすため家をこわして町に出る。夫と浮気相手をバーで見つけたナンシーはバーの屋根をこわして片手で夫をわしづかみにして追手から逃れる。

この作品はダリル・ハンナ主演でTV映画としてリメイクされた。邦題は『愛しのジャイアント・ウーマン』Attack of the 50 Ft. Woman (1953)。夫の浮気によるストレス、宇宙人による巨大化、夫への復讐というストーリーはオリジナルをほぼなぞっているが、一九五八年版ではナンシーは送電線で感電死し、夫もいつしよに死んでしまうのに対して、一九九三年版では、死の直前にUFOに助け出される。UFOの中にはほかにも巨大化した女性があり、その監視下で浮気性の男たちのセラピーが行われている。さらにエンディングでは、登場人物の女性たちがそれぞれ自分の能力を発揮して地位を獲得したことが語られる。

友人関係の不和と自分の劣等感が引き金



となって巨人化に至る作品もある。テレビアニメ「ドラえもん」の第275話「巨大スネ夫あらわる！」(二〇一一年放送)では、新しいゲームをジャイアンに持っていかれたスネ夫は、ジャイアンより大きくなってそれを取りもどそうとする。ドラえもんは嘘をついて、ふりかけると体が大きくなる道具「アットダングンS」を手に入れる。しかし多少大きくなったもジャイアンにはかなわなかったため、どんどんふりかけて巨大化する。ゲームはとりもどしたが、巨大なスネ夫の出現で町は大騒ぎになる。もとのサイズにもどるのに必要とした「スモールライト」をあやまって握りつづけてしまったスネ夫は、それを修理してもらおうあいだ裏山に隠れるのだが、心細くなって流した大粒の涙がドラえもんとおび太を襲い



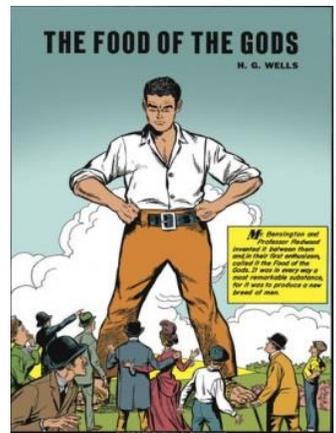
(アリスへのオマージュか?)、さらにトイレに行きたくなって大ピンチとなる。この苦境をどう乗り切るのか?



もう一作はTV映画『アタック・オブ・ザ・50フィート・チアリーダー』Attack of the 50 Foot Cheerleader (2012)。あこがれのチアリーダー部に入部したキャシーだが、外見・身体能力ともいまひとつで、部員からは軽んじられる。そこで友人が開発中の新薬を自分に注射してしまう。彼女は望み通りの体になり、学園の人気者になる。それをねたんだ部長のブリタニーもその新薬を注射する。しかし薬の副作用でふたりの体は巨大化してゆく。最後にふたりはアメフトの試合会場で大バトルを繰り広げる。巨大化したのち、大きなチアのコスチュームを調達するところはうまく工夫している。

(三) 役に立ちたい巨人たち

H・G・ウェルズの『神々の糧』The Food of the Gods (1904)は、おそらくアリスの次に書かれた人間巨大化ものであろう。物語は、生物の成長を飛躍的に促進する物質「ヘラクレオフォービアIV」を開発したふたりの科学者ベンシントンとレッドウッドの実験からはじまる。ふたりは大規模な養鶏場を作つてその物質の効果を実証しようとするが、そこからまれ出した物質で巨大化したスズメ蜂やネ



コミック Classics Illustrated 版の扉絵 (Tony Tallarico 画)

ズミが人間を襲う事件がおきる。結局、ふたりは討伐隊を編成して養鶏場一帯を焼き払い、巨大化した生物を駆逐する。いっぽうレッドウッドは自分の息子の成長が遅いことから、この物質を子供に与えていた。また討伐隊のリーダーを務めた土木技師コッサーに望まれてその三人の息子たちにもその物質を与えていた。このようにして成長促進物質は徐々に世界に広がり、やがて数十人の巨人の青年たちが、ふつうの人間たちのあいだで暮らすようになる。このことに脅威を感じた政治家が規制に乗り出したころ、田舎で育ったひとりの巨人の青年が、与えられた石灰岩採掘の仕事に飽きて村を抜け出し、ロンドンに迷い込み、人々をパニックにおとしいれた末に、銃で殺される。さらに、この物質で巨人化した某国の王女とレッドウッドの息子との恋愛が



問題視されるようになり、ついに小さい人間と大きい人間の戦いはじまる。

ウエルズは二十世紀初頭に書いたこの作品で、①巨大生物（モンスター）との戦い、②都市に巨大生物（巨人）が現れてひきおこされるパニック、③旧人類と新人類の戦い、というSFの有名テーマを先取りしている。ウエルズという『タイムマシン』（1895）、『透明人間』（1897）、『宇宙戦争』（1898）などがよく知られているが、この作品は隠れた傑作である。

生物を巨大化する新物質の開発を扱った作品で日本を代表するものには、手塚治虫の『ビッグX』（1963）がある。第二次大戦末期、兵士を不死にするという新薬「ビッグX」がナチスの研究所で研究されていたが、その秘密は研究者のひとり朝雲博士の死によって失わ

れる。だが二十年後、その息子の体内に埋めこまれた金属板にその製法が残されていることがわかり、ナチス同盟と称する一団によってそれが奪われる。奪い返そうとする博士の孫・昭は、逆にナチス同盟につかまって、新薬の実験台にされるが、その作用で体が大きくなり、銃の弾も跳ね返す。ナチス同盟をけちらした昭は、金属板を父のもとに持って帰る。父は朝雲博士の研究を引継いで、食料問題などに役立つようとするが、またもやナチス同盟が現れ、父は殺される。昭はこの新薬を使って超人「ビッグX」となり、悪者と戦い、宇宙開発にも役立てることを決心する。

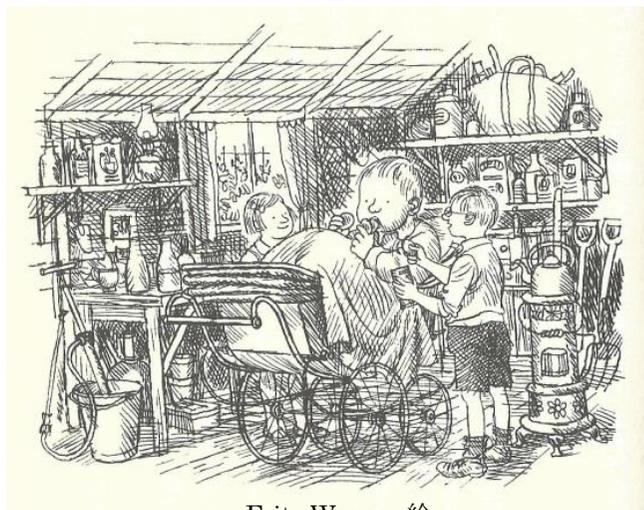
映画『フランケンシュタイン対地底怪獣（バロン）』（東宝、1968）では、ナチスの研究機関で培養されていた「フランケンシュタインの心臓」と呼ばれる不死の器官が、終戦直前にUボートによって国外に運び出され、日本の潜水艦に積み替えられたのち、広島にある軍の医療機関に引き渡される。それを研究すれば多くの傷病者を救うことができるはずだった。だが原爆投下によってその心臓は行方不明になる。十五年後、広島でひとりの少年が医療施設に保護される。彼は異常な速度で成長してゆき、安全のため牢で拘束されるが、脱走して山中に姿を消す。そのころ、秋



田油田の地底から肉食の巨大怪獣が出現し、人間に危害を加えるようになる。やがて富士山麓の中腹で巨大化した少年と地底怪獣は遭遇し、人間の村を守るために少年は地底怪獣と死闘を繰り広げる。

（四）世話のかかる巨人たち

当初舞台劇として発表されたアラン・アルバーグの『ジャイアント・ベイビー』『The Giant Baby』（1994）では、大きな赤ん坊が家の前に捨てられていたところから物語ははじまる。主人公のアリスは、弟が欲しかったので大喜びするが、両親は世話が大変だからと市役所に引き渡そうとする。大きな赤ん坊のことは近所で評判になり、新聞のニュース



Fritz Wegner 絵

にもなる。市役所の担当者が来るまで、週末のあいだめんどうをみることになるが、やがてサーカス団が赤ん坊をさらおうとするし、科学者の一団が正式な手続きをふんで研究対象として連れていこうとする。アリスは友だちの協力を得て、どんどん巨大化する赤ん坊の世話をしながらこれらに対抗する。

吉村萬志の『臣女（おみおんな）』（2014）は、今回取り上げた作品の中でいちばん新しい。夫の浮気を知ったショックから妻の身体

の巨大化がはじまる。その巨大化は頭部も胴も四肢も均等には進まず、さまざまな歪みが生じ、激痛を伴った。それで妻はほとんど家で寝たままの生活になり、まともなコミュニケーションもとれなくなる。夫は高校教師の仕事を続けながら、大量の食料を調達し、排泄物の処理をし、世間の目から妻を隠して、懸命に介護する。だが、悪臭が近所に漏れはじめたことから隠しきれなくなり、また巨大化が進むことから、このままでは家から出せなくなる。そこで夫は幌付きのトラックをレンタルし、水や食料などを積み込んで、夜逃げの準備をする。はたしてこのふたりに未来はあるのか……



カバーイラスト ミロコマチコ

◆まとめ ～巨人はつらいよ～

「縮小化」にはさまざまなメリットもあるが、「巨大化」はデメリットのほうが多い。巨大化することのデメリットを挙げてみよう。

- ① 涙や排泄物などが大量に出る。
- ② 大量の食べ物が必要になる。
- ③ (服もいっしょに巨大化しない場合) 着る物に困る。(服も巨大化するのは、アリス、ジャイアント・ベイビー／マイクロキッズ2、巨大スネ夫のみ)
- ④ 屋内にとどまるには限界があり、場合によっては建物を壊さなければ出られなくなる。
- ⑤ 屋外では目立ちすぎて、隠れていられない。
- ⑥ 体を動かすだけで、物を壊すなど他人に危害を与えかねない。
- ⑦ 脅威を感じた人間たちによって攻撃されるおそれがある。
- ⑧ 必ずしも全員が均等に大きくなるとは限らない。(アリスの首、臣女の全身)
- ⑨ 自分で自分のことができない場合、育児や介護が必要になる。移動するのも大変。(ジャイアント・ベイビー、臣女)

⑩元のサイズに戻れないかもしれない。(今回の取り上げた作品で戻れたのは十二作品中五作のみ)

アリスはこのうち①④⑥⑧が当てはまる。では、メリットはあるだろうか。

①圧倒的な力を得る。交渉や対戦や復讐では有利だし、相手が巨大な場合にも勝ち目がある。

……それ以外にはない！

「巨大化」の作品はさまざまなバリエーションで作られており、それなりの見せ場があるのでビジュアル作品が多く製作されるのはうなずける。しかし、人間を巨大化すること自体が活用性・発展性に乏しいため、「縮小化」にくらべて作品数が少ないのはしかたないことである。

はじめて人間を巨大化するというアイデアを考え出したキャロルの『不思議の国のアリス』から一世紀半。二〇一四年に生まれた吉村萬耆の『臣女』は、そうしたデメリット、メリットをすべて逆手にとつて、息苦しいほどの物語展開で純愛小説として成功し、二〇一五年に第二十二回島清恋愛文学賞(※)を受賞している。ファンタジーの対極にあるリ

アルな作品であるが、「巨大化」のひとつの到達点といえよう。

※島清恋愛文学賞……石川県出身の作家

島田清次郎にちなんで一九九四年に創設された文学賞。当初、石川県美川町の町村合併四十周年を記念して創設されたが、運営が困難になったことから紆余曲折して、現在は金沢学院大学が運営している。

【参考文献】

- ①ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』Alice's Adventures in Wonderland (1865)
- ②H・G・ウェルズ『神々の糧』The Food of the Gods (1904) (小倉多加志訳、ハヤカワ・SF・シリーズ、1972／ハヤカワ文庫、1979)
- ③映画『戦慄ーブルトニウム人間』The Amazing Colossal Man (1957 日本劇場公開 1994)
- ④映画『妖怪巨大女』Attack of the 50 Foot Woman (1958)
- ⑤手塚治虫『ビッグX』(集英社『少年ブック』1963/3～1966/2 連載)
- ⑥映画『フランケンシュタイン対地底怪獣(バラゴン)』(東宝、1965)
- ⑦映画『ジャイアント・スビー／ミクロキッズ2』Honey, I Blew Up the Kid (1992) [小説化] トッド・ストラッサー『ジャイアント・スビー』(寺山智佳子訳、扶桑社ミステリー、1993)
- ⑧TV映画『愛しのジャイアント・ウーマン』Attack of the 50 Ft. Woman (1993)
- ⑨アラン・アルバーグ『ジャイアント・ベイビー』The Giant Baby (1994) (井辻朱美訳、講談社、1996)
- ⑩藤子・F・不二雄 TVアニメ『ドラえもん／巨大スネ夫あらわる!』(テレビ朝日、2011.12.9 放送)
- ⑪TV映画『アタック・オブ・ザ・50フィート・チャリダー』Attack of the 50 Foot Cheerleader (2012)
- ⑫吉村萬耆『臣女(おみおんな)』(徳間書店、2014／徳間文庫、2016)
- ⑬鳥山仁、嵯峨斐峰『巨大娘研究 サブカルチャー批評の終焉と再生』(三和出版、2012)
- ⑭佐藤正明『人間縮小化の技術史——ルイス・キャロルとその後継者たち』(日本ルイス・キャロル協会、ミッシェヌマツシユ第九号、2017)